

幼児教育保育学科学生の乳児保育学習による親性準備性の変化（第2報）

著者	井田 史子，前田 隆子，鈴立 恭子
雑誌名	鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要
号	75
ページ	11-20
発行年	2017-07-01
出版者	鳥取看護大学・鳥取短期大学
ISSN	2189-8332
URL	http://doi.org/10.24793/00000020

幼児教育保育学科学生の乳児保育学習による親性準備性の変化（第2報）

井 田 史 子・前 田 隆 子・鈴 立 恭 子

Fumiko IDA, Takako MAEDA, Kyoko SUZUTATE :

Development of Readiness for Parenthood of Students in the Department of
Childcare and Education through the Infant Care Training (2)

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第75号 抜刷

2017年7月

幼児教育保育学科学生の乳児保育学習による親性準備性の変化(第2報)

井田 史子¹・前田 隆子¹・鈴木 恭子¹

Fumiko IDA, Takako MAEDA, Kyoko SUZUTATE:

Development of Readiness for Parenthood of Students in the Department of Childcare and Education
through the Infant Care Training (2)

本研究は、幼児教育保育学科学生の特性を知り、乳児保育の授業と、保育所での実習体験を通じて、乳児の受け止め方の変化を見ることを目的とした。A 短期大学幼児教育保育学科1年生を対象に、平成28年度前期開始時と1年終了時の2回アンケート調査を実施した。内容は対児感情と親性準備性を、尺度を用いて測定し、その変化を見ることで学習の効果を検証した。対象学生は、花沢(1992)が調査した大学生より接近感情は高く、回避感情は低い値であった。1年間の学習で、対児感情の接近感情を高めることはできた。親性準備性は開始時に高い値であり、終了時低下した項目があった。接近感情の上昇が、必ずしも育児積極性を高めることにつながらなかった。

キーワード：幼児教育保育学科学生 対児感情 親性準備性

はじめに

保育士養成課程における科目「乳児保育」では、乳児の発達の理解と、人間形成の基礎となる時期における愛情を持った子供の受け止め、ならびに次への展開を考える洞察力の育成をめざしている¹⁾。学生は他にも多くの乳児保育に関連する科目、演習実習を体験する。そこで平成27年度後期の開始前後で乳児の受け止めの変化を調査し報告した²⁾(以後、「前回調査」とする)。今回は平成28年度入学時より1年間の、講義・演習を通しての変化を見るために同様の調査を行った。

鯨岡は「保育実践と子育て論」の中で「いまの親は子供を主体として受け止めることが難しい」と述べている³⁾。保育所等で1日の長い時間関わる保育者も、親と同世代であり、同じように言えると考えた。

本研究では、保育士を目指す学生の特徴を知り、

乳児保育の授業と保育所での実習体験を通じて、乳児の受け止め方がどのように変化しているのかを知り、「乳児保育」での、講義と演習の在り方を検討することを目的とする。

1. 研究の方法

(1) 研究対象者：A短期大学幼児教育保育学科の1年生(以後、「保育学生」とする)140名(後期終了時132名)

(2) 研究期間：平成28年4月1日～平成29年1月31日

(3) データ収集方法：無記名自記式質問紙調査。調査は、1年前期開始時(以後、「開始時」とする)と後期終了時(以後、「終了時」とする)の2回行った。

(4) 質問紙の構成

対象者の属性としては、性別、年齢、兄弟の人数、家族構成、親に対する感情、乳児との接触経験、学科選択の各項目を調査した。

乳児との接触経験は、乳児を抱いた経験と0歳児

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

と遊んだ経験が、「よくある」を2点, 「1度ないし数回ある」を1点, 「経験はない」を0点とした。

対児感情は、花沢の対児感情評定尺度⁴⁾を使用した。項目は、接近感情14項目、回避感情14項目である。接近得点と回避得点は、接近項目と回避項目のそれぞれから求める。両項目とも「非常にそのとおり」を3点, 「そのとおり」を2点, 「少しそのとおり」を1点, 「そんなことはない」を0点として、接近項目と回避項目の個人得点を求めた。

育児感情の評価項目は、佐々木の親性準備性尺度⁵⁾を使用した。佐々木の親性準備性尺度は24項目である。「そのとおりである」を4点, 「どちらかと言えばそうである」を3点, 「どちらとも言えない」を2点, 「どちらかと言えば違う」を1点, 「違う」を0点とした。逆転項目は点数を逆転して、個人得点を求めた。

(5) 統計学的検定は、SPSS23で行なった。対象と対児感情・親性準備性の相関関係は、独立サンプルによるMann-WhitneyのU検定を行ない、有意水準は $P < 0.05$ とした。

2. 用語の定義

対児感情とは、「乳児に対する感情」をいう^{注1)}。

接近感情とは、「児を肯定し受容する方向の感情」をいう。回避感情とは、「児を否定し拒否する方向の感情」をいう。

親性準備性とは、「乳幼児への好意感情と育児への積極性」をいう^{注2)}。

3. 倫理的配慮

(1) 対象者の保護と安全の確保

- 1) 学内掲示で、学生にアンケート調査の協力者を募集した。
- 2) 協力の同意の得られた学生に対し、アンケート用紙を配布、アンケートの参加は自由意思であること、本研究の参加・協力は回答をもって同意が

得られたものと判断することを説明した。

(2) インフォームド・コンセント

アンケートの紙面上と配布時に口頭で研究目的・倫理的配慮について研究者が説明した。

アンケート内容は対児感情・親性準備性の尺度を使用したもので、直感的に感じた状態をチェックし、深く考えないで記入するように説明した。

本研究は鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認(申請番号2015-15)を得て平成27年より継続して実施した。

4. 調査結果

(1) アンケート回収数は、開始時は合計137名、回収率97.9%。終了時は合計115名、回収率87.1%であった。

(2) アンケート結果の対象者の属性(表1)

開始時の属性について述べる。

年齢は、平均 18.1 ± 0.70 歳(平均値 \pm 標準偏差、以後、同様に表す)であった。

男性16名(14.0%)女性98名(86.0%)

兄弟の人数は2人が最も多く54名(47.4%)、次いで3人が39名(34.2%)であった。

「5歳以上の歳の差の弟妹がいる」が24名(21.1%)、そのうち「10歳以上歳の差の弟妹がいる」は6名(5.2%)であった。

「親が好きと感じる」は97名(88.2%)。「親が怖いと感じたことがある」は78名(69.0%)であった。

子どもとの接触体験では、「乳児を抱いた経験が良くある」は29名(25.4%)、「0歳児と遊んだ経験が良くある」は25名(21.9%)。「1~3歳児と遊んだ経験が良くある」は40名(35.1%)、「4~5歳児と遊んだ経験が良くある」44名(39.3%)であった。

保育士を目指した最も大きな理由では、「子どもが好き」が77名(68.1%)であり、次いで「保育士という職業に憧れている」が28名(24.8%)、「両親・学校の先生に勧められた」6名(5.3%)という

結果であった。

(3) 対児感情と親性準備性（表2, 3）

開始時の接近感情点数は平均 30.02 ± 5.88 , 回避感情点数は 7.43 ± 5.18 であった。終了時の接近感情点数は 31.93 ± 6.29 , 回避感情点数は 8.85 ± 7.32 であった。接近感情が開始前に比較して終了後において有意に上昇していた ($P = 0.006$)。

項目別の比較では、以下に示す項目で有意に上昇した。対児感情尺度の接近感情「あたたかい」 2.61 ± 0.51 から 2.74 ± 0.48 ($P = 0.02$)、「あかるい」 2.39 ± 0.66 から 2.63 ± 0.63 ($P = 0.001$)、「あまい」 1.74 ± 0.94 から 2.10 ± 1.02 ($P = 0.001$)、「みずみずしい」 1.88 ± 0.94 から 2.23 ± 0.89 ($P = 0.002$)、「うつくしい」 2.04 ± 0.88 から 2.24 ± 0.86 ($P = 0.045$) であった。回避感情でも以下に示す項目で有意な上昇が見られた。「めんどくさい」 0.21 ± 0.44 から 0.40 ± 0.70 ($P = 0.041$)、「みっともない」 0.09 ± 0.33 から 0.24 ± 0.62 ($P = 0.02$)、「うらめしい」 0.12 ± 0.39 から 0.28 ± 0.60 ($P = 0.015$) であった。前回調査では「じれったい」が 1.27 ± 0.84 から 0.91 ± 0.90 に有意 ($P = 0.035$) に低下したが、今回は 0.30 ± 0.66 から 0.39 ± 0.71 ($P = 0.284$) でわずかに上昇していたが有意差はなかった。

親性準備性の乳幼児への好意感情では、開始時の合計が 32.99 ± 4.01 , 終了時が 32.09 ± 5.28 であった。育児への積極性では、開始時の合計が 35.29 ± 5.21 , 終了時が 34.14 ± 6.7 であった。

項目別の比較では、好意感情の「知りたいと思う」が 3.76 ± 0.52 から 3.48 ± 0.74 で有意に低下した ($P = 0.00024$)。育児への積極性では、以下の項目で有意に低下した。「自分もしたい」 3.51 ± 0.72 から 3.25 ± 0.87 ($P = 0.009$)、「育児は素晴らしい仕事」 3.82 ± 0.44 から 3.68 ± 0.59 ($P = 0.019$)、「親は輝いて見える」 3.39 ± 0.70 から 3.17 ± 0.75 ($P = 0.022$)、「自分も成長できる」 3.82 ± 0.41 から 3.60 ± 0.67 ($P = 0.003$) であった。前回調査では「育児は楽しいと思う」が有意に上昇したが ($P = 0.016$)、今回は 3.18 ± 0.79 から 2.99 ± 0.92 に低下

したが有意差はなかった ($P = 0.113$)。

(4) 対児感情, 親性準備性と対象の属性との関連（表4, 5）

接近感情, 回避感情, 乳幼児への好意感情, 育児への積極性, 対象の属性の項目の「乳児を抱いた経験」, 「0歳児と遊んだ経験」について, それぞれの相関を見た。

開始時で弱い相関がみられたものは, 接近感情と好意感情 (相関係数 0.396 , $P < 0.01$), 接近感情と育児積極性 (相関係数 0.238 , $P < 0.01$), 回避感情と好意感情 (相関係数 -0.270 , $P < 0.01$), 好意感情と乳児を抱いた経験 (相関係数 0.271 , $P < 0.01$), 好意感情と0歳児と遊んだ経験 (相関係数 0.234 , $P < 0.05$), 育児積極性と乳児を抱いた経験 (相関係数 0.208 , $P < 0.05$), 相関があったものは, 回避感情と育児積極性 (相関係数 -0.411 , $P < 0.01$), 好意感情と育児積極性 (相関係数 0.583 , $P < 0.01$), 乳児を抱いた経験と0歳児と遊んだ経験 (相関係数 0.679 , $P < 0.05$) であった。

終了時で弱い相関がみられたものは, 接近感情と好意感情 (相関係数 0.235 , $P < 0.05$), 回避感情と好意感情 (相関係数 -0.375 , $P < 0.01$), 回避感情と育児積極性 (相関係数 -0.479 , $P < 0.01$), 相関があったものは, 好意感情と育児積極性 (相関係数 0.580 , $P < 0.01$), 乳児を抱いた経験と0歳児と遊んだ経験 (相関係数 0.808 , $P < 0.05$) であった。

5. 考察

乳児保育に求められているものは, 愛情を持った子供の受け止めである。いわゆる母性と言われているもので, 本来人間を含め動物には備わっているものである。ボウルビィは「養育行動という私の概念の中心となるのは, 両親による安全基地の提供である。」と述べている⁶⁾。男女共同参画が推進され, 母親は家で育児をする時代は過ぎている。それに伴い乳児保育の必要性も増し, 十分な母親の愛情が必要な乳児期に, 保育の場でも, 両親と同じように安

全基地となれる存在の人材が必要である。

保育学生は、乳児をどのように捉えているか、保育に対する心構えはどのようなものであるかを知る必要があると考えた。今回対象の学生は、保育士を選んだ理由として、子供が好きであると68.1%が答えている。前回調査では80.9%であった。保育士という職業へのあこがれが24.8%、前回調査では14.9%であり、今回は1/4が職業としての保育士に関心を持っている。アンケートの開始時が入学直後であり、回答率が高い。しかし、属性に対して無回答が多く、欠損値として統計処理を行っている。

乳児に対する感情を、対児感情評定尺度で測定した。花沢の調査の、未婚の大学生の接近感情、回避感情の得点と比較すると今回の保育学生も前回調査と同様に高い得点であった。また、花沢は乳児との接触が多くなると接近感情は高くなると述べている⁴⁾。花沢の研究結果と同じように、接近感情は開始時と終了時を比較すると有意に高くなっていたが、回避感情、乳幼児への好意感情、育児への積極性では有意差はなかった。

項目別でみると、接近感情で「あたたかい」「あかるい」「あまい」「みずみずしい」「うつくしい」で上昇している。接近感情の前回調査は、前期授業での学習効果もあり、開始時の合計が今回調査の入学時より1.82高い。今回は4月開始の調査であり、接触体験での効果が出た結果となった。しかし、終了時の合計は、前回調査32.98に対して今回は31.93で前回調査が1.05高い結果であった。

回避感情の「じれったい」が前回調査では有意に低下していた。今回低下したのは「よわよわしい」「むずかしい」であったが、有意差はなかった。しかし、「めんどくさい」「みっともない」「うらめしい」との回避感情項目が有意に上昇し、養護する上での不安な一面をうかがわせた。回避感情は開始時7.43で前回調査の14.4に比べ低い値である。終了時も8.85で前回調査の13.23より低い。回避感情について、濱は看護大学生の調査において、「回避感情が高い学生は、実習後は低下し、低い学生は逆

に高くなる」と述べている⁷⁾。個別の対比までには至らないが、前回調査では回避感情の高い学生が多いため終了時に低下し、今回は開始時に回避感情が低い学生が多いため終了時に回避感情が上昇していたと考えられる。全体では傾向にとどまり有意差には至っていない。また花沢の調査では、「回避感情は多接触群と少接触群の有意差はなかった」と報告している⁴⁾。

また対児感情の好意感情項目の「知りたいと思う」、育児積極性の「自分もしたい」「育児は素晴らしい仕事」「親は輝いて見える」「自分も成長できる」で点数が有意に低くなっている。好意感情・育児積極性とも、全体では低下しているが有意差はない。

前回調査では、親性準備性尺度の全項目が3以上であったが、今回の調査では逆転項目である「世の中から取り残される」「視野が狭くなる」「つらい仕事」「自分の好きなことができない」「自信がない」に対し同意する回答の学生が前回に比べ多くあった。1/4の学生が保育士へのあこがれをもって入学しているが、保育という仕事を、安易なものとは考えていない。さらに保育所実習後も有意な変化が出ていない。平石賢二は『思春期・青年期のころ』の中で大学生の発達の特徴として「育てられなかった側面として、たとえば自己肯定感、他者を信頼する力、感情、考える力、言語能力、コミュニケーション能力などが育っていないように思う」と述べている⁸⁾。今回対象の学生の多くが、実習はとにかく大変で疲れたと訴えた。アンケートの回答率も2回の調査とも前回調査の2倍であり、演習に対しても意欲的に取り組んでいる。

今年度の授業では沐浴・おむつ交換・調乳授乳・計測を、人形を用い全員が実施し、愛情を持って接することとはどういうことかを伝えた。また危険予知トレーニングを、前回は場面ごとの絵を見て行っていたが、今回はそれに加え実際にあったアクシデント事例⁹⁾を通して、田中の保育園用K-SHELを用いて分析し¹⁰⁾、観察力と乳児の行動を予測すること、職員間の連携を大切にした予防策を検討している。こ

のアクシデント事例では、我が子をなくした両親の思いが綴られており、児を預かることの責任の重さと、その子らしさを理解すること、保育に対する思いを大切に継続することの大切さを伝えようとした。演習内容で育児積極性が低下したとは考えにくい、保育現場での厳しさを感じていると考える。

対児感情、親性準備性尺度、育児経験の相関では、前回調査と同様、開始時は親性準備性尺度の好意感情と育児積極性で、接近感情と乳児を抱いた経験に正の相関が、回避感情で負の相関があった。終了時は好意感情と育児積極性で、回避感情で負の相関が軽度強くなった。また、育児積極性では接近感情、乳児を抱いた経験でも相関がみられない。接近感情は上昇していたが、親性準備性は低下している。

乳児保育では対児感情の接近感情と共に、育児積極性を高く維持する必要がある。1年間の乳児に対する講義と技術演習では、乳児を十分に理解することは難しいのではないかと考える。知識を得て実習を行い、保育を仕事として体験することにより、自分に不足している部分が、理解できると考える。幼児教育保育学科は2年間の学習で保育士の資格を得ることができる。ボウルビイは「子どものアタッチメント行動を直感的に理解し、それに応答し、それを人間に本来そなわった貴重な部分として扱うことがなければ、成長してゆく子どもに安全な基地を提供することはできない」と述べている⁶⁾。これからの1年間で、さらに乳幼児に対する洞察力を養うことが必要である。

まとめ

対児感情尺度、親性準備性尺度を用い、A短期大学幼児教育保育学科1年生のうち協力の得られた、後期開始時137名、後期終了時115名の自記式質問紙調査を行った。この結果以下のことが分かった。

(1) A短期大学幼児教育保育学科の、今回調査対象の1年生の特性は、乳児との接触経験は約35%が持っていた。学科を選んだ1番の理由は「子供が

好きだから」68%、「保育士へのあこがれ」25%である。

(2) 対児感情の接近感情は花沢調査の一般大学生より高値であり、終了後も上昇した。回避感情は低い値を示し、終了時「めんどくさい」「みっともない」「うらめしい」が上昇した。

(3) 親性準備性尺度では開始時・終了時ともに育児に否定的な項目に同意する回答が多く、接近感情の上昇が必ずしも育児積極性を高めることにつながらなかった。

研究の限界

今回の調査は、対象とした保育学生の97.9%の回答が得られた。終了時の結果は、前回調査と一致する値になっていない。前回調査回答率は50%以下であり、保育学習の積極性に偏りがあったとも考えられる。また感情はその時の状況に大きく作用される。2年間の調査であり、すべての保育士を目指す学生にあてはまるものではない。

謝辞

本研究のアンケートにご協力いただいた、A短期大学幼児教育保育学科1年生の皆様に深謝申し上げます。

注

1) 対児感情評定尺度は、花沢⁴⁾の定義したものにしたがう。

2) 親性準備性尺度は、佐々木⁵⁾の定義したものにしたがい、乳幼児への好意感情と育児の積極性に分け、「どちらでもない」を入れ5段階評価(0-4)としている。平成27年度は評価点数の配点を「どちらでもない」を削除し、4段階評価(1-4)に改変して使用している。

3) 親性準備性の表に記載した項目のRは、逆転項目を示しており点数を修正して加算している。

引用・参考文献

- 1) 大橋喜美子『乳児保育』（新時代の保育双書），
みらい（2009），pp.11-39.
- 2) 井田史子他「幼児教育保育学科学生乳児保育
学習による親性準備性の変化」、『鳥取看護大学・
鳥取短期大学研究紀要』第73号（2016），pp.1-9.
- 3) 鯨岡和子「保育実践と子育て論—子どもを一人
の主体として受け止める—」、『そだちの科学』第
10号（2008），p. 57, p. 59.
- 4) 花沢成一『母性心理学』，医学書院（1992），p.
73, p. 81, p. 241.
- 5) 佐々木綾子「親性準備性尺度の信頼性・妥当性
の検討」、『福井大学医学部研究雑誌』第8巻，第
1号・第2号合併号（2007），pp. 41-49.
- 6) ボウルビー・二木武監訳『母と子のアタッチメ
ント 心の安全基地』，医歯薬出版社（1993），p.
14, p. 15.
- 7) 濱耕子「母性看護実習を受講する学生の対児感
状の変化と特徴」、『三重看護学誌』（2007），pp.
83-88.
- 8) 平石賢二編著『思春期・青年期のこころ かか
わりの中での発達』，北樹出版（2008），p. 143.
- 9) 猪熊弘子『死をまねいた保育』，ひとなる書房
（2011）.
- 10) 田中哲郎『保育園における事故防止と安全管
理』，日本小児医事出版社（2011）.

資料

表1 対象者の属性

人数(%) %は有効回答者数から算出した

		今回調査				参考資料		
		開始時 n=137		終了時 n=115		前回調査開始時 n=48		
年齢（平均値±標準偏差）		18.1	±0.7			18.9	±1.0	
性別	男性	16	(14.0)	20	(18.5)	5	(10.4)	
	女性	98	(86.0)	88	(81.5)	43	(89.4)	
	無回答	23		7				
現在の家族形態	一人暮らし	21	(18.4)	23	(21.5)	3	(6.8)	
	家族と同居	81	(53.3)	71	(66.4)	32	(66.7)	
	その他	12	(10.5)	13	(12.1)	13	(27.1)	
	無回答	23		8				
兄弟の人数	1人	10	(8.8)	7	(6.5)	4	(8.5)	
	2人	54	(47.4)	53	(49.1)	18	(38.3)	
	3人	39	(34.2)	36	(33.3)	19	(40.4)	
	4人	9	(7.9)	9	(8.3)	6	(12.8)	
	5人以上	2	(1.8)	3	(2.8)	0	0.0	
	無回答	23		7				
5歳以上の歳の差のある兄弟	ある	24	(21.1)	29	(26.9)	15	(31.3)	
	ない	90	(78.9)	79	(73.1)	33	(68.8)	
	無回答	23		7				
10歳以上の歳の差のある兄弟	ある	6	(5.2)	8	(7.4)	5	(10.4)	
	ない	109	(94.8)	100	(92.6)	43	(89.6)	
	無回答	22		7				
親が好き	はい	97	(88.2)	94	(88.7)	44	(91.7)	
	いいえ	13	(11.8)	12	(11.3)	4	(8.3)	
	無回答	27		9		(親が優しいと感じる)		
親が怖いと感じたことがある	はい	78	(69.0)	68	(63.6)	30	(62.5)	
	いいえ	35	(31.0)	39	(36.4)	18	(37.5)	
	無回答	24		8				
子どもとの接触体験	乳児を抱いた経験	よくある	29	(25.4)	29	(26.9)	11	(22.9)
		1度ないし数回	74	(64.9)	71	(65.7)	34	(70.8)
		経験はない	11	(9.6)	8	(7.4)	3	(6.3)
		無回答	23		7			
	0歳児遊んだ経験	よくある	25	(21.9)	31	(29.0)	12	(25.0)
		1度ないし数回	57	(50.0)	57	(53.3)	27	(56.3)
		経験はない	32	(28.1)	19	(17.8)	9	(18.8)
		無回答						
	1～3歳児と遊んだ経験	よくある	40	(35.1)	43	(39.8)	17	(35.4)
		1度ないし数回	71	(62.3)	63	(58.3)	31	(64.6)
		経験はない	3	(2.6)	2	(1.9)	0	0.0
		無回答	23		7			
	4～5歳児と遊んだ経験	よくある	44	(39.3)	46	(42.6)	18	(37.5)
		1度ないし数回	67	(59.8)	61	(56.5)	29	(60.4)
		経験はない	1	(0.9)	1	(0.9)	1	(2.1)
		無回答	25		7			
目指した理由	子供が好きだから	77	(68.1)	76	(70.4)	38	(80.9)	
	保育士という職業に憧れている	28	(24.8)	23	(21.3)	7	(14.9)	
	両親・学校の先生の勧め	6	(5.3)	5	(4.6)	2	(4.3)	
	その他	2	(1.8)	4	(3.7)	0	0.0	
	無回答	24		7				

表2 対児感情

		開始時		終了時		P 値	前回終了時 (参考)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
接近感情	合計	30.02	5.879	31.93	6.287	0.006	32.98	4.980
あたたかい		2.61	0.505	2.74	0.479	0.020	2.81	0.395
うれしい		2.47	0.631	2.57	0.578	0.220	2.64	0.522
すがすがしい		1.60	0.844	1.73	0.985	0.195	1.96	0.713
いじらしい		1.15	1.033	0.98	0.982	0.213	1.17	0.955
しろい		1.87	0.906	2.04	0.959	0.079	2.19	0.810
ほほえましい		2.83	0.376	2.80	0.481	0.872	2.79	0.409
ういういしい		2.45	0.747	2.51	0.742	0.428	2.49	0.724
あかるい		2.39	0.656	2.63	0.628	0.001	2.66	0.649
あまい		1.74	0.941	2.10	1.021	0.001	2.28	0.885
たのしい		2.34	0.720	2.37	0.755	0.532	2.72	0.495
みずみずしい		1.88	0.939	2.23	0.892	0.002	2.09	0.904
やさしい		2.32	0.727	2.38	0.812	0.272	2.49	0.669
うつくしい		2.04	0.878	2.24	0.864	0.045	2.21	0.793
すばらしい		2.44	0.674	2.58	0.649	0.054	2.51	0.576
回避感情	合計	7.43	5.180	8.85	7.316	0.420	13.23	6.510
よわよわしい		1.85	0.977	1.69	1.003	0.207	2.06	0.691
恥ずかしい		0.61	0.799	0.77	0.958	0.288	1.15	0.864
くるしい		0.26	0.546	0.43	0.739	0.056	0.62	0.765
やかましい		0.56	0.716	0.59	0.794	0.984	0.75	0.830
あつかましい		0.19	0.522	0.29	0.659	0.157	0.42	0.692
むずかしい		1.64	0.969	1.44	1.010	0.116	2.00	0.855
てれくさい		0.80	0.841	1.17	1.011	0.003	1.65	0.968
なれなれしい		0.27	0.613	0.43	0.828	0.182	0.87	0.921
めんどくさい		0.21	0.444	0.40	0.698	0.041	0.53	0.823
こわい		0.37	0.686	0.45	0.797	0.511	0.96	0.919
わずらわしい		0.18	0.452	0.28	0.600	0.173	0.49	0.750
みっともない		0.09	0.332	0.24	0.615	0.020	0.36	0.682
じれったい		0.30	0.657	0.39	0.710	0.284	0.91	0.904
うらめしい		0.12	0.385	0.28	0.600	0.015	0.51	0.697

表3 親性準備性

		開始時		終了時		P 値	前回終了時（参考）	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
好意感情	合計	32.99	4.012	32.09	5.278	0.210	35.19	2.122
	赤ちゃんが好き	3.80	0.526	3.74	0.622	0.287	3.96	0.192
	かわいと思う	3.92	0.322	3.83	0.550	0.084	3.98	0.137
	知りたいと思う	3.76	0.522	3.48	0.742	0.000	3.87	0.342
	関心がある	3.64	0.652	3.55	0.728	0.302	3.92	0.267
	遊ぶことが好き	3.64	0.615	3.55	0.704	0.226	3.91	0.295
	あやしたり笑いかける	3.50	0.698	3.50	0.718	0.991	3.91	0.295
	抱いてみたい	3.63	0.606	3.62	0.720	0.714	3.91	0.295
	世話をするのが好き	3.40	0.742	3.31	0.788	0.368	3.85	0.361
	興味がある	3.66	0.623	3.52	0.776	0.171	3.89	0.320
育児積極性	合計	35.29	5.211	34.14	6.701	0.085	44.81	9.661
	自分もしたい	3.51	0.719	3.25	0.867	0.009	3.81	0.441
	楽しみ	3.44	0.685	3.25	0.907	0.198	3.55	0.637
	楽しいと思う	3.18	0.788	2.99	0.922	0.113	3.53	0.608
	育児は素晴らしい仕事	3.82	0.441	3.68	0.586	0.019	3.74	0.486
	親は輝いて見える	3.39	0.699	3.17	0.752	0.022	3.53	0.723
	親の生きがい	3.36	0.766	3.22	0.803	0.120	3.53	0.723
	自分も成長できる	3.82	0.406	3.60	0.673	0.003	3.87	0.342
	R 世の中から取り残される	1.93	1.016	1.97	1.166	0.746	3.28	0.885
	R 視野が狭くなる	1.78	1.045	1.75	1.052	0.938	3.36	0.834
	R 疲れてみすばらしい	2.86	1.072	2.70	1.133	0.256	3.38	0.765
	R つらい仕事	1.07	0.982	1.27	1.029	0.103	3.13	1.127
	R 好きなことができない	1.45	0.899	1.47	0.921	0.695	3.02	1.083
	R 育児をすることに自信がない	1.71	1.030	1.74	1.060	0.918	3.09	1.005

R は逆転項目^{注3)}

表4 対児感情・親性準備性尺度・育児経験の相関（開始時）

	接近感情	回避感情	好意感情	育児積極性	乳児を抱いた経験	0歳児と遊んだ経験
接近感情		.124	.396**	.238**	.149	.137
回避感情			-.270**	-.411**	-.094	-.098
好意感情				.583**	.271**	.234*
育児積極性					.208*	.173
乳児を抱いた経験						.679**
0歳児と遊んだ経験						

*. P<0.05 **. P<0.01

表5 対児感情・親性準備性尺度・育児経験の相関（終了時）

	接近感情	回避感情	好意感情	育児積極性	乳児を抱いた経験	0歳児と遊んだ経験
接近感情		.030	.235*	.101	.011	.057
回避感情			-.375**	-.479**	-.048	-.058
好意感情				.580**	.134	.105
育児積極性					.018	.037
乳児を抱いた経験						.808**
0歳児と遊んだ経験						

*. P<0.05 **. P<0.01